

第 13 回 ODA 評価ワークショップの開催 (概要と評価)

平成 27 年 12 月 11 日

12 月 9 日及び 10 日、外務省は JICA、日本評価学会などの協力を得て「第 13 回 ODA 評価ワークショップ」を東京（三田共用会議所）で開催したところ、その概要及び評価は以下のとおり。

1 概要

濱地雅一外務大臣政務官による冒頭挨拶の後、2 日間にわたり 3 つの全体セッション及び 2 つの分科会を実施。最後に廣野良吉成蹊大学名誉教授による議長サマリーがとりまとめられ、豊田欣吾外務省国際協力局審議官が閉会の挨拶を行い終了した。

(1) 冒頭挨拶

濱地雅一外務大臣政務官は冒頭、参加者が相互に学び合うことを通じて、アジア・大洋州諸国における ODA 評価に関する理解の促進や能力強化の一助とするべく、日本は 2001 年から 12 回の ODA 評価ワークショップを開催してきたとしてワークショップ開催の意義を説明した。また、2015 年は、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の採択や、開発協力大綱の閣議決定、国際評価年の設定など、開発協力分野において国際社会、日本にとっても節目となる年であったと指摘した。

評価やモニタリングに対する国際社会の関心が高まる中、国際評価年を締めくくるイベントとしてこのワークショップにおいて参加者による活発な意見交換が行われ、アジア・大洋州諸国における評価の取組、更には評価ネットワークの強化に寄与することを祈念する旨述べた。[\(挨拶全文 \(PDF\)\)](#)  



(2) 議論の概要

- (ア) 第 1 セッション「開発協力における評価のフィードバックメカニズム」では、エビデンスに基づく政策策定に資する評価の重要性や、事業実施にあたっては評価のための予算を配分しておくことの必要性などが指摘された。
- (イ) 第 2 セッション「評価能力の開発・向上と評価におけるオーナーシップ」では、途上国の評価能力の向上のための課題及びこのために先進国がどのようなサポートを出来るかについての意見交換が行われた。
- (ウ) 分科会 1「エビデンスに基づく政策策定のためのインパクト評価の活用」では、開発協力プロジェクトで近年実施が増えてきているインパクト評価の基本及び世界的な潮流について議論が行われ、JICA によって実施されたインパクト評価の最近のケーススタディが紹介された。
- (エ) 分科会 2「環境・気候変動プロジェクトの評価」では、開発計画立案の時点で気候変

動対策を考慮していくことの重要性が指摘されるとともに、フィジーにおける気候変動プロジェクトの評価システムが紹介された。

- (オ) 最終セッション「SDGs 達成に向けた評価の新たな課題」では、SDGs において多くの目標とターゲットが設けられたことを踏まえ、これらの目標達成のために戦略的なアプローチやあらゆるステークホルダーを巻き込んでいくこと、及び評価を最大限活用することの重要性が指摘された。また、SDGs 達成を図るために変革型評価を用いることが提案された。



2 評価

- (1) 今回のワークショップには日本を含め28か国及び3国際機関からの過去最多の参加者があり、特に太平洋諸国からの参加者も多く、アジア大洋州諸国から幅広い参加を得た。また、日本国内からも外務省・JICA・日本評価学会関係者のほか有識者も参加し、実務面だけでなく学術的な観点からのインプットも行われた。
- (2) さらに、各セッションのテーマとして SDGs や気候変動・環境問題など参加者の関心の高い問題も含め幅広いテーマを設けることで、活発な意見交換が行われた。
- (3) 参加者からは各セッションで積極的な発言があり、途上国における評価能力育成、制度整備に対する意欲が示された。議長サマリーでは参加国・国際機関は評価の質を高めるために今後も対話を続けていくことが確認された。こうした結果、ODA 評価の手法や ODA 評価に関わる課題についてアジア・大洋州諸国における理解を促進し、評価能力の向上を図るという本ワークショップの目的は達成されたものと考えられる。
- (4) さらに、国際評価年を締めくくるイベントとして東京で ODA 評価ワークショップを開催することで、日本の存在感をアピールし、評価の取組をアジアから世界に向けて発信することが出来た。



(了)